

## 命の尊さこそ普遍的な事実

「アフガンでは、飢餓地獄の巷に凍てつく冬将軍が迫っていた。緊急のアフガン問題は、政治や軍事問題ではない。パンと水の問題である。命の尊さこそ普遍的な事実である」

— 中村 哲 (『天、共に在り』より)

## PMSは全ての事業を継続します

— アフガニスタンの現状とPMSの今

ペシャワール会会長／PMS総院長

村上 優まさる

アフガニスタン情勢は二〇二一年八月十五日のカブールの無血開城以降、多くの報道や論評がなされています。PMSは情勢を見極め、職員の安全を確保するために一旦は事業を休止しました。治安と安全が確認できたところで八月二日にドラエヌール診療所を再開、九月二日にはレモンの収穫を機にガンベリ農場の作業を一部再開しました。用水路事業は、九月四日にナンガラハル州灌漑局と協議、再開を待っているところです。

この間、PMSの活動地であるアフガン東部の農村地帯では大きな変化もなく治安上の懸念はありませんでした。ジャララバードではデモやISへの報復攻撃があったと報じられましたが、人々の生活上のトラブルは特段生じておらず、八月二日にはバザールは従来の賑わいを回復し、閉鎖されていた銀行も九月四日には条件付き(二

〇〇ドル/人/週)で再開しました。首都カブールでも同様で、カブール空港周辺以外の治安上の懸念は表面化していません。タリバン政府の陣容が暫定ながら公表され、地方でも州知事や郡長が決まりつつあります。中央官庁では灌漑用水路事業に係る農村復興開発省や水エネルギー省の体制には大きな変化がないようですが、NGOを所轄する経済省などの方針はまだ伝わってきません。

今後の焦点は、これまでアフガニスタンを支えてきた多くの分野の人材がどれほど留まっているのか、タリバンがこのような人材にどう対応するのか、国だけでなく州や郡にいたるまでの行政システムが機能するののか、ということです。

四〇年以上続く戦争が壊してきた人々の命と生活を、地域でつなぎとめてきたのが、PMSの活動でした。対立し、意見や立場



再開したダラエヌール診療所で外傷の手当  
てをしている様子。(2021年8月29日)

灌漑事業の休止を決定して、多くのPMS職員はそれぞれの自宅に家族と留まり注意深く推移を見ていました。

その後は現地スタッフ全員の安全が確認され、周辺での治安上の問題はありませんでした。カブールもジャララバードも静か

を異にする人々が一つの用水路を建設する。その姿が希望の灯となります。ペシャワール会はアフガニスタンの人々と共に、その灯を点し続けることを中村哲先生から託されました。私たちはその道を歩きます。

## 1. PMS現地事業の一時休止からの動き

八月十五日以降の動きは、PMS幹部より日本のPMS支援室に逐一報告があり、関連した海外ニュースを交えて情勢を把握しております。八月十五日より医療・農業・



日常の光景が戻ったジャララバード市内。所狭しと店が並び、活気が伝わってくる。(2021年9月10日)

## 2. 事業再開へ向け

で、八月二日ごろにはバザールが日常化してきました。一般的な治安は保たれ、政変が起きる度に繰り返し見られた略奪や混乱はありませんでした。カブール空港は人が集まり混乱がみられましたが、出国を待つ人々だけでなく職を求める人々なども多く混じっているようでした。

安全を確認し、まずは医療など一刻も待



てない事業から順次再開しました。

◎医療 一九九一年に開設したダラエヌール診療所は農村無医地区医療計画かまめの要でした。また水事業が始まった原点でもありません。以前より新型コロナウイルス、特にデルタ株の流行が広がり、呼吸困難を訴え酸素吸入を要する患者が急速に増えていました。診療にあたる医療職員の感染防御のために、七月にはN-95などの医療用の特殊マスクを急遽日本から送るなどの対応をしました。



記者会見でアフガニスタンの大干ばつを訴える中村先生とジア医師  
(2018年11月16日)

夏はマラリアや腸チフスの流行期なので、住民からの診療所再開を求める声も多く、安全を確認して八月二日より再開しました。

◎農業 農作物や用水路周辺での植樹への水やりは地域の住民や作業員の手で継続されてきました。九月二日にはガンベリ農場のあるシェイワ郡長より「いつから再開するのか、治安は安定している」という連絡があり、事業を再開しました。

◎灌漑用水路 ナンガラハル州知事の就任を待って工事を再開する予定です。シギ・

ゴレークなどの新規工事は政府の基本的な体制(展望)を確認した上で始まります。干ばつの進行による食糧不足、飢饉の懸念から、灌漑用水路はアフガニスタンにとって緊急の課題です。地元住民の声が最も大切で、この声が政権に届くためには、ジルガヤシューラという長老会の自治組織が重要な役割を果たします。中村哲先生もその自治組織の意向を尊重して事業を根強く継続されてきました。

中村先生が残した詩を紹介します。

自然相手は、ただ根気  
何があっても ただ水やり  
褒められてもくさされても ただ水やり  
誰が去っても倒れても ただ水やり  
嬉しくても疲れていても ただ水やり  
風が吹いても日照りでも ただ水やり  
邪魔されても協力されても ただ水やり  
誰が何と言おうと ただ水やり  
魔法の薬はありません

### 3. 過去のタリバン政権時代から

一九九〇年代のタリバン政権下でも中村哲先生は事業を継続しており、農村部では治安が改善して事業を進める上では支障がないばかりか、安全であったと述べられて

います。

一九八〇年代後半のソ連軍撤退後、軍閥による闘いの末、ラバニ政権が樹立されました。しかし、内戦はおさまらず、凄惨に極めるもので、当時のペシャワール会報にも中村哲先生が報告をされています。それをイスラム法というアフガニスタンの伝統的な価値観でまとめて一九九六年に政権を取ったのがタリバンでした。今回はガニ大統領がタリバンの攻勢の前にカブールの無血開城を選択しました。多くの批判がありますが、「戦闘を回避した」決断は評価してよいと思います。

憎しみの連鎖が生まれて国が荒れ果てる、その戦争の歴史をアフガニスタンの人々は四〇年以上経験し続けてきました。中村哲先生は「タリバンを復古運動体と考えるなら、軍事力で潰せるものではない。誰が政権を担う場合でもアフガン人自身の政権であることが重要」と述べていました。アフガニスタンを舞台に大国や周辺国が代理戦争をしていることが不幸の始まり、と考えるアフガニスタンの人々も多くいます。

二〇年ぶりのタリバン政権ですが、中村哲先生がこれまでそうされていたように、「水が善人・悪人を区別しないように、誰でも協力し、世界がどうなるうと、他所



アフガニスタンが大干ばつの最中、PMSは2008年までに約1600本の飲料用井戸を掘削した。(2002年8月11日)



PMSが掘削した井戸で水汲みをする子供たち。遠い水汲み場へ毎日出向く女性たちは重労働から解放された。(2001年4月26日)

#### アフガニスタンの人口と干ばつの被害

	2000年	2018年	2021年
人口	2,400	3,700	4,000
飢餓線上	400	830	2,000
餓死線上	100	330	1,400

単位：万人（国際機関による概数）

中村先生は二〇〇〇年の大干ばつを機に

#### 4. 戦より食糧を

に逃れようのない人々が人間らしく生きられるよう、ここで力を尽くします。内外で暗い争いが頻発する今でこそ、この灯りを絶やしてはならぬと思います」の言葉を胸に現地事業を続けてまいります。

水事業を始めました。その後も干ばつは進行し、二〇二一年は近年最悪の被害をもたらした二〇一八年を上回る被害が予測され、国際機関などが支援を呼びかけています（表参照）。

今年、PMSが行っているクナルル河での水位測定は二〇一八年と同様の低い水位のパターンで経過しています。前政権も農地復旧に力を入れ、灌漑事業をPMS方式で進める計画を立てました。これらの政策が踏襲されるか否かはタリバン政権の判断を待たねばなりません、多くの民衆がま

ず第一に「家族一緒に三度の食事をとる」ことを求めているのですから、おのずと選択は決まるでしょう。また新型コロナウイルス株が猛威を振るう中で栄養が足りず免疫力が弱いものから倒れていく事実を思う時に、いまアフガニスタンに必要なことは命をつなぐ行動であることは明白です。PMSの事業に猶予はありません。

日本でも多くの地域で新型コロナウイルス株による感染が拡がる中、PMS/ベシャワール会をここに留め、支援していただいていることに感謝申し上げます。  
(九月十七日記)

#### ▼未使用の切手、書き損じハガキ（官製ハガキ・年賀ハガキ）をお送り下さい

\*引き出しの中などに眠っているものをお送りいただければ幸いです。会報発送等に使用させていただきます。なお、外国の切手は取り扱っておりません。

#### ▼現地活動を紹介するパンフレットをお送りします

\*ベシャワール会の活動をご紹介されるときにお使いいただけるものです（払込用紙がついています）。ご希望の方は事務局にご連絡下さい。パンフレットはA3変形を四折りましたもので、長形の定形封筒に入るカラー版です。なお、パンフレット、会報等は受け取る意思のある方への配布を原則としております。（ポスティング等は御遠慮下さい）